明治～戦前期における養子慣行の観察
日本帝国人口動態統計と新聞記事を中心に

大沼 洋文(麗澤大学大学院 博士課程)

本発表は養子慣行研究の成果が乏しい明治～戦前期にスポットを当て、「帝国動態統計表」と当時の新聞記事を「養子」に着目してまとめを行い、幕末までの養子研究と戦後の養子研究の架け橋となることを目標とする。

日本の養子慣行は、古くは奈良時代には律令制度の一部としてすでに組み込まれており、それから今日まで家族を次世代へと繋ぐ装置として途絶えることなく存在してきたとされる（林紀昭 1988「日本古代社会の養子」竹内亘ら『擬制された親子』三省堂）。竹内利美が『家族慣行と家制度』(1969 恒星社厚生閣)において行った近代以前の養子の類型では、家の継承を目的とした「跡取養子」の一つとして、婿として妻の家に養子と婚姻を同時に行う「ムコ養子」を示している。その後の研究によって、婿養子には即席の労働力としての役割が指摘(上村正名「労働力確保の観点による養子」竹内亘「養子の概念と目的」『擬制された親子』三省堂)され、婿養子には継承と労働力に対する期待が寄せられているといえよう。徳川期東北農村の養子慣行を分析した黒須によれば、子を迎える需要側の視点に立ち、婿養子を含む養子慣行は「無子夫婦にとっては実子に変わる次世代確保の選択肢」であったことが指摘されている（2020「歴史人口学から見る程出生力社会の養子―金星東北農村 1716-1870 年を中心に-」津谷典子ら編著『人口変動と家族の実証分析』慶應義塾大学出版会）。

一方で戦後から現代に至るまでの養子研究は、児童福祉を目的とした養子（ピーター ヘイズ、土生としえ 2011『日本の養子縁組: 社会的養護施策の位置づけと展望』明石書店）や、晩婚化による不妊治療の代替的手段としての養子（野辺陽子 2018『養子縁組の社会学: 〈日本人〉にとって〈血縁〉とはなにか』新曜社）が確認出来る。

明治時代以前の養子縁組を、血縁にこだわらない柔軟な家継承の戦略だとするならば、戦後の養子慣行は家の継承とは異なる目的の養子慣行が出現、広がっていると捉えることができる。しかし今日、明治から戦前までの養子縁組研究は非常に乏しいため具体的な変化の過程をたどることができない。日本の家族の変遷をたどるためにも、どのように、どのタイミングで養子慣行は家の継承という目的から変わってきたのか、もしくは変わらなかったのかを明らかにする必要がある。

そこで明治 32 年より編纂された『日本帝国人口動態統計』と明治から戦前までの新聞記事を養子に着目してまとめを行い、近代日本における養子観と養子の存在の確認を行った。

『日本帝国人口動態統計』には明治 37 年より婿養子と入夫（養子縁組を伴わない婿入り）の件数が都道府県ごとに記録されており、連続した変化の観察が可能である。婿養子は普通養子とは異なるため、観察結果を養子一般に当てはめることは無理であるが、婿養子を入夫、そして普通婚姻と比較することが可能である。

新聞記事の観察では朝日新聞と読売新聞の 2 つを用い、記事・広告から当時の養子観を探った。興味深いことに、養子を求める、また子供の養子先を求める広告の両方が確認でき、また婿養子に対するバッシングを描かれている記事も確認できた。

２つのまとめを通じ、明治時代以降も養子慣行は江戸時代と変わらず人々の営みの中に存在していたが、婿養子の件数が多い件、少ない件が存在し地域ごとの差が存在することが確認できた。営みの中に存在し続ける婿養子であるが、「入夫・婿養子の増加は意気地なし男の増加」と記事に書かれる（朝日新聞 1915 10 月 2 日朝刊「房総特報/結婚状態の変遷 骨なし男の増加」）ように、婿養子を蔑視する風潮がある可能性も確認できた。また、新聞が広告を通じ養子縁組の媒介人の役割を果たしている点も確認できた。

（キーワード：養子慣行、婿養子、近代）